別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（ 文学 ） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	勝又 悠太朗
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論 文 題 目 (Title of Dissertation)

地場産業産地の再編と存立形態に関する地理学的研究

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主 査 (Name of the Committee Chair) 教授 友澤 和夫

審 査 委 員 (Name of the Committee Member) 教授 奥村 晃史

審 査 委 員 (Name of the Committee Member) 教授 野島 永

審 査 委 員 (Name of the Committee Member) 准教授 後藤 拓也

審 査 委 員 (Name of the Committee Member) 教授 由井 義通 （教育学研究科）

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

日本の地場産業はグローバル化の進展、市場の変化、担い手の不足などによって、縮小や衰退に直面している。その一方で再編を経験しつつも、環境変化に適応し、競争優位性を発揮している産地もある。本論文は、こうした地場産業を対象として、新たに確立された産地の存立形態の特徴を地理学的な観点から論じるものである。

本論文は、序論、４章からなる本論、そして結論により構成される。

序論では、地理学および隣接諸分野の研究を展望し、本研究で採用すべき方法論と分析枠組みを検討している。そこでは、今日まで存続している地場産業産地がいかに競争優位性を維持・獲得してきたのか、それを企業の戦略と生産・流通体制の変化より明らかにすることが述べられる。その際に、地場産業の地域的存立基盤、公設試験研究機関などの非企業主体の役割、産地外主体との関連の３つを分析軸とすることの有効性が示される。

本論第１章では、工業統計などの統計データの量的解析により、1990年代後半以降における日本の地場産業の動向を捉え、その衰退は一様ではなく産業・業種や地域ごとに異なることを示す。併せて、第２章以降で対象とする３つの地場産業産地の位置づけを得ている。

第２章では、1990年代以降も出荷額の拡大傾向が続く愛知県瀬戸陶磁器産地を取り上げる。当産地は食器・置物類の海外輸出で発展してきたが、円高の進行に伴い碍子や自動車部品など多様な産業用陶磁器を生産する産地に再編されたことが明らかにされる。産地内には、特定の品目に特化する企業と製造品目を多様化させている企業が共存しており、双方の生産・流通システムが捉えられ、前者は取引先の固定化、後者ではその広域化を特徴として描き出している。

第３章では、国内最大の工芸品鋳物産地である富山県高岡銅器産地を取り上げる。当産地では、今世紀に入ってからデザイン性を重視した自社オリジナル製品を展開する企業が増えたこと、それに伴う外注取引先の拡大と、産地問屋に依存していた販売が自社直接販売へ転じたことが論じられる。そしてオリジナル製品の開発には、地元の公設試験研究機関や産業支援事業が果たした役割や、産地外のデザイナーとの関係構築がもたらした効果も大きかったことが示される。同時にそれは、産地のオーガナイザーであった産地問屋の弱体化をもたらし、産地の再編につながったとする。

第４章では、衛生用紙を生産する企業の集積地としては国内最大の静岡県富士衛生用紙産地を取り上げる。衛生用紙は国際競争の程度が小さく、産地の生産規模は依然拡大傾向にある。同産地で

は、有力企業が合併・系列化を進め生産の集約化が図られ、小売チェーンと直接取り引きする体制が確立され、それが産地の再編をもたらしたとする。なお、当地の優位性として首都圏に隣接することによる古紙収集の利便性、および豊富な水源の存在も強調されている。

　結論では、これまでの考察結果がまとめられ、日本の地場産業産地の再編は、産地内企業の多様性・独自性の高まりと階層性の明瞭化、産地外主体との関連の強化と産地問屋の役割低下などを伴い、必ずしも産地企業のすべてに恩恵をもたらすものではなかったとする。併せて、知識・学習ネットワーク構築の意義が論じられるとともに、今日の産地の存立基盤に経路依存性が存在することが示されている。

　このように本論文は、日本の地場産業に関する数量的な把握を踏まえた上で、その再編のメカニズムを現地で収集した質的データに基づいて明らかにした労作である。堅実で説得力の高い議論がなされており、地場産業研究の発展に資する重要な論文と評価できる。

　以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)